りびんぐらいぶず 令和3（2021）年8月第3号

信心正因 称名報恩の課題を再び超えて

称名聞名 信心正因

◆ご讃題

しかれば、名（みな）を称するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。称名は則ちこれ最勝眞妙の正業なり。正業は則ちこれ念仏なり。念仏は則ちこれ南無阿弥陀佛なり。南無阿弥陀佛は即ちこれ正念なりと。知るべしと。

（Ref『行文類』「称名破満釈」註釈版 P146）

◆はじめに

Ｈゼミで懇意にして下さっているＫさんは退職後一念発起して中仏の専修課程を御受講なさった熱心な御門徒さんです。

Ｋさんは、岡亮二先生の『教行信証』の行巻を読み進められ、

親鸞聖人は

・①第十八願の「十念」を称名であり、

・②本願成就文の「一念」は信心であり、

・③流通分 弥勒付属の「「一念」は、称名であると述べられていることから、

「称名から信心に至る」のが親鸞聖人のお考えであり、「信心正因　称名報恩」は、信心に至る道を示すものではないと思われるとおっしゃっていて下さいます。

◆歴代宗主の御言葉をどう見て来たか

宗門では、歴代宗主の御言葉も親鸞聖人の御言葉そのものとして、これに批判の筆を加えること等は、畏れ多いことであるという姿勢が採られてきました。

◆でも果たしてこのような態度をとり続けることが親鸞聖人のみ教えに違背して、お法りが現代社会に伝わり難くなっているとしたら、これを放置することはできません。

歴史的には、**「信心正因　称名報恩」**というお法りを浄土真宗の教義の上に導入されたのは、覚如上人だと言われております（Ref『口伝鈔』第二十一条、註釈版 p910）。

覚如上人のお立場を尊重してお伺いしてみますと、「如来の大悲は、短命の根機を救いの主たる対象とする」というのですが、是は俄には首肯することが困難ですね。

なぜなら、浄土真宗のお法りは臨終義ではなく、平生業成義だったからです。

「信心正因　称名報恩」の意図は、法然聖人のみ教えと峻別して親鸞聖人のみ教えをお

伝えしようとなさった覚如上人の戦略に基づきますが、昭和二十一年に宗制として制定されたことが今日の難点であります。

勧学寮で入門用に監修された教材に『安心論題綱要』『真宗の教義と安心』)等がありますが、称名念佛が極端に貶められ、行巻の御自釈に違背し理解に苦しむのです。

因みに、『真宗の教義と安心』に列挙された根拠を抽出しますと次のようになります。

・①一生涯の称名から一声の称名までとあり（『往生礼讃』(註釈版 p165)、数の多少を問わないようなものは必須ではない、とか、

・②「下至十声・一声等」(『往生礼讃』)は「下至十声聞等」(『集諸経礼讃儀』）とあり、「一声」が「聞」に変わりうる以上、称名念佛によって往生成仏が決定するのではない等と記されているのが目に留まります。

一体、何時から願文上の念仏の要義をここまで貶める必要があったのでしょうか。

・③信とは、名号が衆生の心に至り届いた姿であり、称名は、信相続の為に名号が衆生の口にでてきた姿であるとも説かれます。

念佛は必須ではないとしつつ、なぜ信相続の為に出てくる必要があるのでしょう。

面白いことに、「聞」の門構えは「聲」の「声」と「殳」と形が酷似すると別科で教わったことがあります。

声に出した称名は、衆生の耳に「勅命」となって聞名されるというのがプロセス上無理のない見方ですから、「聞」とあるのは「声」を否定したことにはなりますまいに。

◆梯　實圓和上はどのようにご覧遊ばしたか

曾て不肖は、梯　實圓和上から行信教校のご講義で次のように承りました。

一、ご常教の欠陥は、法の次元である「行」を機の次元で捉えたこと（報恩感謝は、機の次元である）にある。これは教学の乱れを来す（Ref2013年1月ご講義)。

二、親鸞聖人の「信」は、念仏往生の願に基づく救いが、

・①いつ確定するか(時剋釈)、

・②そのときの機の相状はどのようであるか(信相釈)を明確化された概念である(Ref2013年4月20日ご講義）

不肖には、梯　實圓和上の御解釈が最も本質的で明確であると承れるのであります。

◆大行釈を法の働きから機の次元で頂戴する

如来様は、苦悩の衆生を救わんが為にお手許で如来様の尊い行（大行）を成就され、衆生に回向して下さったのです。

それ故、衆生はただ「さようか（信相)」と頭を垂れ、仰せのままに衆生の行（お念仏すること）を行ずればよかったのです。

行ずれば、それは如来様の行（大行）でしたから、称えれば、直ちに私の上に大行が働き出され、如来様のお喚び声となって届いて下さるのでありました。

そうすると教学上の乱れを来していた**「信心生因　称名報恩」**ではなく、信楽先生が主張された**「信心正因 称名正定業」**と捉えれば、法の次元の**「称名正定業」**を発願回向して下さっていたものと受けとめられます。親鸞聖人ご自身も称名破満釈で「称名はすなはちこれ、最勝眞妙の正業なりと明らかにして下さっていたのでした。

◆諸仏称名のお姿に習う行いの次元で捉えれば**「信心正因 称名讃仰」**となるでしょうね。

諸仏如来ならばこそ、お名号の素晴らしさを讃嘆なさる。衆生は回向された大行を行ずれば聞こえて下さるお名号をお聞かせに与って「何と尊いことよのう、まことまこと」と讃仰させて戴ける。これは、称名→聞名の道行きを明らかにするものに他ありません。

如来様が本願力回向により衆生をして讃仰するまでにお育て下さるのですから、

阿弥陀仏の御名を聞き、

歓喜讃仰せしむれば、

功徳の宝を具足して、

一念大利無上なり。と謳われているのです。

(Ref『讃阿弥陀仏偈和讃』第三十首、註釈版聖典 p561)

◆称名→聞名の道行き全体なら**「称名聞名　信心正因」**となるでしょうね。

諸仏如来（→他力の念仏者）の讃仰のお念仏を聞名すれば、私もまた随念してお念仏したくなります。お念仏は、讃仰行ですから、聞名（三昧）に繋がり、終に信心獲得するのだということになるのでありました。　合掌。

◆正覚寺仏壮お聴聞の会　八月八日(日)二十時より

◆正覚寺歓喜会（かんぎえ）　八月二十一日(土)午前十時より

◆その成果を公開したHPは、「正覚寺　北小松」で検索し、ヒットする「FC2」からお入り戴けます。

著作編集兼発行元（本願寺派 正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地

TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥